



▲ジェネオン・エンタテインメントから発売中のDVD『青い沼の女十中・短編集』には、実相寺昭雄監督のハイビジョン撮影のためのデモンストレーション作品『東京幻夢』（脚本・監督・実相寺昭雄、1986年作品）とTVドラマ『波の盆』で使用された池上通信機のビデオカメラ、EC-35のデモンストレーション作品『春への憧れ』（1984年作品）の2本がTVドラマ『青い沼の女』と共に収録されている。セリフを廃した映像と音楽だけで見せる一編の映像詩。4700円（税込4935円）、実相寺映像ファン必見！ 『東京幻夢』で堀内正美さんは、古い写真館の青年を演じ、現実の東京と幻影の中を放浪する。エロティシズムの幻影が映像や写真に結像していく。

●演劇から俳優へ、やがて出会おう実相寺監督の衝撃！

——「俳優にならないか」と言われてすぐやる気になったんですか。「僕ですか？ あの……僕……演助手ですけど」、俳優になる気なんて毛頭ありませんでした。山田和也プロデューサーは、正月から始まる夏目漱石の『門』と「それから」を原作にした文芸ドラマ『わが愛』という作品の主人公を演じる加藤剛さんの弟役を探していて、オーディションをしたり、芝居を見てびつたりの俳優を探していた。すると舞台の準備で走り回っている僕が目にとまったんだそうです。僕は俳優志願じゃないと話んですが、芝居は出来なくてもいいから、何とか出演してくれ」と懇願されました。その場でお断りしたんですが、最後には熱意に負けて、出演することになりました。それを終えたら、舞台の演出に戻らなりました。ですが、次々に俳優の仕事が頼まれていって、いつしか俳優が本業になってしまったんです。不思議な気分でしたね……」

——実相寺監督と会う前に、奥様である女優の原知佐子さんと知りあったそうですが、それは？

「1973年正月のTBSの金曜ドラマ『わが愛』でデビューして、二作目が同年4月スタートの日本テレビの月曜劇場『恋ちりめん』で、原知佐子さんは僕のお姉ちゃん役で、そこで共演したんです。浪人時代に実相寺昭雄監督の映画『無常』や『曼陀羅』とかATGで見たので、そうか、この方が奥さんなんだ」と結びついて、さりげなく「僕は御主人の映画が大好きなんです」と言ったら、「あっ、そうだけ笑。それで終って、何年かたった時に映画『歌麿／夢と知りせば』をやる時に、製作の葛井欣二郎さんから呼ばれて、堀内くん、歌麿」で監督は実相寺昭雄さんだ」と言われて、喜んで出してもらったんです。後日談ですけど、実相寺さんは僕のこととは知らなかったそうです。原さんから聞いたんですけど、「あなたの好きなタイプが出てきたよ」と原さんが言っていて、実相寺監督が「あっ、そう。何に出てるの？」と聞いて、何かのドラマで見て、「うん、好きだね」と言われたんですって」

——『歌麿／夢と知りせば』の撮影現場はいかがでしたか？

「衣装合わせにも髪合わせにも監督は立ち合わない。指示された日に京都の撮影所へ行って扮装して、ステージへ入っていったら、座敷のシーンをやりました。すると真っ白なサラシのハチマキを巻いている人がカメラの横に立って、もう少しこちらへと指示を出してる。あの『無常』を撮った監督がなんでサラシのハチマキしてるんだって思いました。丁度その日は、海外から映画『カサンドラ・クロス』のJ・B・コスマトス監督が撮影の見学に来ていて、実相寺監督は流暢な英語で会話していました。監督にあいさつをして、監督は監督ですから、芝居は自由にやって下さい」と言われた。これには「あ痛っ」と思いました」

——他の監督の場合は、何かを言ってくるんですか？

「普通は監督、このシーンはこう考えるんですが」と言ったり、それはそついうことより、こういう表現の方がいいんじゃないかと、ディスプレイがあつて探り合う、それがまるで出来ないんです」